

「トリーキョー」が二〇二〇年夏季オリンピック開催都市に選ばれてから、多くの場で「オリンピックの遺産」オリンピック・レガシー」が語られていた。招致時には「今、ニッポンにはこの夢の力が必要だ」と語られていたように、当初はオリンピックの招致は開催都市の東京だけでなく、全国にもオリンピックによる「レガシー」が残るように訴えられていたが、今日では多くの議論が「オリンピックがいかに日本の首都・トリーキョーを変えていくか」に収斂しているように感じる。招致決定から三年弱経った今、改めてオリンピックが地方都市に与える可能性を二〇二二年のロンドン大会を参考に考えてみたい。

ロンドンでも二〇二〇年の東京オリンピックと同様、オリンピックがイギリス全土にどのような恩恵をもたらすかが課題となっていた。やはり大きいのは観光である。オリンピック招致前の二〇〇三年と大会開催後の二〇一三年を比較して、ロンドンでは観光者数が四三・六%増加したのに対して、ロンドン以外の都市では二・三・一%の増加となったのである。ロンドンには及ばないものの、オリンピックを契機に地方都市により多くの人が足を運ぶようになったのだ。これはインバウンドツーリズムが予想以上の活況を呈している現在の日本の状況からも想

各 人 各 説

オリンピックと地方創生

滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科 准教授

白井宏昌

Hiomasa Shirai



像がつくが、ここで注目したいのは、ロンドン大会では、この状況が大会の前後でより戦略的に作られていった点である。例えば、大会の四年前から開催されるカルチュラル・オリンピック・ードと呼ばれるオリンピックの文化プログラムはイギリス全土に展開することによって、全国の地域振興に大きな貢献をすることとなった。これは多様な芸術・文化が存在する日本の地方都市にとっても大いに参考になるだろう。また、競技施設以外のスポーツ観戦としてお馴染みのパブリック・ビューイングも、ロンドン大会では広く国内で開催され、多くの地方都市で、市民が競技に熱狂できる「場」を作り出した。そしてそれらの「場」が一過性のものとならず「レガシー」としてオリンピック後も活用され、より魅力的なまちを創る仕組みが形成されていったのである。

今日のオリンピックはグローバル都市間競争の中で、すでに政治的あるいは経済的求心力のある大都市が、さらなる飛躍を求めて開催するものとなってしまっている。しかし私たちは、オリンピックは地方創生を促す手段としても多くの可能性があることを認識し、それを最大限活用すべきであろう。さらに言えば、地域ごとに多様な文化を持つ日本ならではの、オリンピックと地方創生のありかたを世界に発信することが、二〇二〇年東京大会では重要となるだろう。